

2009.10.6 (木)

免疫や抵抗力が弱く、新型インフルエンザのハイリスク層とされる子どもたち。徳島大学病院小児科の渡辺浩良講師に、重症化のサインを見落とさないための対処法を聞いた。

備える 新型インフル

覚えておきたい対処法

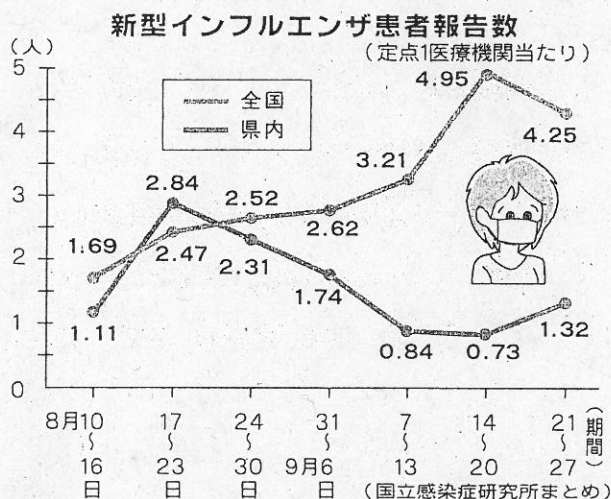
子どもが新型インフルエンザに感染し重症化した場合、最も恐ろしいのは、インフルエンザ脳症や重症肺炎の合併だ。

季節性インフルエンザの場合、インフルエンザ脳症になる子どもは年間100〜200人程度。厚生労働省が発表した資料では、新型インフルエンザでも31例（9月29日現在）の脳症が報告されており、同月21日には、滋賀県で7歳の男児がインフルエンザ脳症により死亡した。

脳症の症状は、けいれん（ひきつけ）、意識障害、錯乱、興奮、異常言動・行動など。

渡辺さんは「脳症は、発熱して短期間で症状が出る場合もあるが、予測はできない。熱性けいれんとの区別が難しい場合もあるが、

重症化しやすい子ども



脳症や肺炎合併に注意

「なら15分以内で、繰り返さない」と注意を呼び掛ける。

日本小児科学会（事務局・東京都）がこのほど改定したインフルエンザ脳症ガイドラインでは、診断指針に脳波、MRI（磁気共鳴画像装置）などを加え、早期診断・早期治療へ結びつける体制を強化している。

一方、日本小児科学会が9月23日に東京都内で開催した新型インフルエンザに

「けいれんが持続して意識回復が遅いときは、まず疑うこと。一般的な熱性けいれん

同フォーラムに参加した渡辺さん。徳島大学病院小児科外来で診療している「幼稚園の年長児や小学生など、乳幼児よりも少し大きい子どもの肺炎が多いようだ」と話す。子どもの場合は、肺炎や脳症のサインがないか、一番身近にいる両親（保護者）が、常に気に掛けておかねばいけない。

ただ、インフルエンザの場合、早期診断が付きにくいという難点がある。過去の症例の蓄積が少ない新型では、なおさらだ。

せきや発熱、けん怠感など、感染すると、インフルエンザ脳症や重症肺炎になる可能性もある」と話す渡辺さん＝徳島大学病院



「感染すると、インフルエンザ脳症や重症肺炎になる可能性もある」と話す渡辺さん＝徳島大学病院

親がサイン見逃さないで

簡易検査には、通常5〜10分ほど要する。待合室で待機している間に、他の患者へ感染を拡大してしまったり、本当は感染していなかったのに、他の患者から感染してしまったりする可能性もあるからだ。

また、医療機関のパンクを防ぐため、食欲や元気がある場合には、病院や夜間休日の受診を控え、日中に診療所などのかかりつけ医を受診してほしいという。

渡辺さんは「抵抗力の弱い子どもの場合、できるだけ受診回数を減らすことが大切。子どもの健康状態を一番よく知っている親が、子どもの状態をよく観察して、重症化のサインがなければ自宅で様子を見るなど、冷静な対応が必要だ」と話している。

(随時掲載します)